

『この時のために』ヨハネ12:27-33

12:27 今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。

12:28 父よ、み名があがめられますように」。すると天から声があった、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」。

12:29 すると、そこに立っていた群衆がこれを聞いて、「雷がなったのだ」と言い、ほかの人たちは、「御使が彼に話しかけたのだ」と言った。

12:30 イエスは答えて言われた、「この声があったのは、わたしのためではなく、あなたがたのためである。

12:31 今はこの世がさばかれる時である。今ここの世の君は追い出されるであろう。

12:32 そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」。

12:33 イエスはこう言って、自分がどんな死に方で死のうとしていたかを、お示しになったのである。

●序論

旧約聖書の中でエステルという人物のある決意と覚悟

エステル4:14 この時にあたってあなたが口を閉ざしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」

それに対する、エステルの答えも短く引用しておきましょう。

エステル4:16 「…このようにしてから、定めに戻ることではありますが、私は王のもとに参ります。このために死ななければならないのでしたら、死ぬ覚悟でおります。」

この勇気ある行動により、ユダヤ人たちは滅びから守られた、それが物語の結末です。

「この時のために」確かに、彼女の「覚悟」につながる言葉となったのです。

今日、エルサレムで最後の日々を過ごすイエスさまの言葉にこうあります。

12:27 (新共同訳) 「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。

イエスさまは、たまたま運悪く十字架につけられたわけではありません。ご自分で「まさにこの時のために来た」と、ご自分の時を見つめておられた、そこに覚悟があるのです。

●本論

I. 心が騒ぐと言われる方

福音書の各書は、あのゲッセマネの園での祈りを描きます。

「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」と言われ、

マタイ26:39 そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さ

い」。

ヨハネの福音書では、この祈りの姿を記録しません。その代わりに今日の個所です。

12:27 今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい。しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。

12:28 父よ、み名があがめられますように」。

弱いイエスさまではいけない。当時も、今を生きる私たちもそう思うかもしれませんが。しかし、弱くなってくださるほどに、人と同じになってくださったイエス様に、私たちは、救いを見ることができるとのことです。

ヘブル2:17-18

:17 そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。

:18 主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。

「大祭司」というと、のちにイエスさまと対峙する権力者…のイメージがあるかもしれませんが、それはこのイエスさまと大きく違います。

ヘブル4:15-16

:15 この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。

そしてつづきにこうあります。

:16 だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。

わたしたちの幸いは、わたしの弱さも愚かさも、悩みも頼りなさもよく知っていてくださり、とりなしてくださる方を「主、救い主」と呼べることです。

だから「はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」と励まし、促されているのです。いやお互いに、そう励まし合ってともに御座に近づくことができる。それが教会の交わり、礼拝の姿なのです。

II. 神さまが語られる覚悟

12:28 父よ、み名があがめられますように」。

・・・

すると天から声があった、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」。

天からの声、父なる神さまの御声です。

「栄光をあらわす」それはすべてがキリストを通してなされる、人の罪のための贖いのわざに結びついています。

だから、「そして、さらにそれをあらわすであろう」と言われるとき、神さまが、その愛する独り子、その命の犠牲を通してでも、私たちに罪と滅びから救おうという思いの表れがその「声」となってあらわされたのです。

ヨハネは、ここで「言葉」と言わずに、父なる神さまの「声」と表しています。

ただ、そこにいた群衆はこう反応しています。

12:29 すると、そこに立っていた群衆がこれを聞いて、「雷がなったのだ」と言い、ほかの人たちは、「御使が彼に話しかけたのだ」と言った。

不思議なもので、群衆の耳に必ずしも神さまの声が神さまの声として聞こえたわけではなかった。おそらくその言葉は届いてはいたけれども意味が分からなかった。だからこそ、

12:30 イエスは答えて言われた、「この声があったのは、わたしのためではなく、あなたがたのためである。

と前置きし、その言葉のもとに、これから起こる事柄をお話になっているのです。

その「声」が何を語っていたか、ということがのちにわかるようになるのです。

あの十字架、そして復活、さらには聖霊によって目が開かれて、その声がわかる。

祈りの中で、聖書を読むときに、またクリスチャンの友を通して、聞くことのある、神さまの声があります。だから、イエス様が言われあの言葉を覚えておくことは大切です。

「この声があったのは、わたしのためではなく、あなたがたのためである。」と。

Ⅲ. この時に何が起こるかを語る

ここで天からの声が語「さらに栄光をあらわそう」ということの内容がイエスさまによって語られます。

:31-32 「…今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」。

簡潔に言うと、この世の君というのは、サタンのこと。だから裁かれるこの世というのはこのサタンの支配ということです。それは素晴らしいことです。

しかし、この後 彼らが目にするのは、自分たちが想い願っていたありさまとは全く違うものでした。 現実に裁かれたのは、救い主と期待された主イエス様でした。

祭司長や律法学者たち、当時のユダヤの支配者層にとらえられ、さらに支配者の象徴ローマの手に渡され、ピラトのもとで裁きにかけて鞭うたれ、そして犯罪人の一人として十字架につけられて殺されていったのです。

どう見ても、真逆にしか見えない。そんな姿です。

しかし、このイエスさまが負われた十字架こそ、私たちの罪の重さなのです。

12:33 イエスはこう言って、自分がどんな死に方で死のうとしていたかを、お示しになったのである。

「傷跡」という賛美を覚えておられるでしょうか。

イエスさまが 背負っていく カルバリの丘 目指して

イエスさまの 肩にかかる十字架は わたしの罪の重み

裏切られ ののしられても 泥沼から 救うために

あなたの十字架 その手の傷あとは わたしのための 愛のしるし

あなたの十字架 その手の傷あとは すべてを捨てても つらぬいた愛のゆえ

わたしの犯したすべての自分中心の罪の重みを、誰よりもイエスさまがすべて知っておられるのに、わたしを愛し、愛しぬいて身代わりとなってくださったと言えるその証が、あの、人の目には無様としか見えないあの十字架であらわされているのです。

そしてイエスさまは言われました。

12:32 そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」。

約2千年を経て生きる私たちが、なぜこのイエス・キリストに「愛」を見ることができか、それはあの十字架なくして語れません。神の愛の証であるからです。

●さいごに

「愛することに覚悟がいる」。

今日、イエスさまは、あの十字架に目を向けて

:27-28 今わたしは心が騒いでいる。わたしはなんと言おうか。父よ、この時からわたしをお救い下さい。

しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです。

父よ、み名があがめられますように」。

この祈り答えて天からの声、

「わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう」。

このすべての言葉に、私たちを救うためにイエスさまが、そして父なる神さまが命の犠牲をもって、わたしたちを、すべてをもって愛し、罪と滅びから救おうと決断された覚悟が見えるのです。

私たちはこのような神さまの愛の覚悟のもとに救われているのです。

だから、私たちはこの愛にこたえていきたい。そうして私たちもまた愛し合い、励ましあって、主の恵みの中を生きてきたいと心から願うのです。